福岡歴史研究会　会員研究発表会資料＜勉強会＞

テーマ「奥野説で解ける邪馬台国の位置」　　講師・石合六郎

≪初めに≫

いまだに不毛の議論を繰り返す「邪馬台国機内論」が横行している。この議論には奥野正男氏の「行程論」で決着がついたと私は考えている。今回はその考えにもとづけば、ほぼ場所も特定できることを皆さんと一緒に地図上で検討したいと思う。

(1)　邪馬台国への道

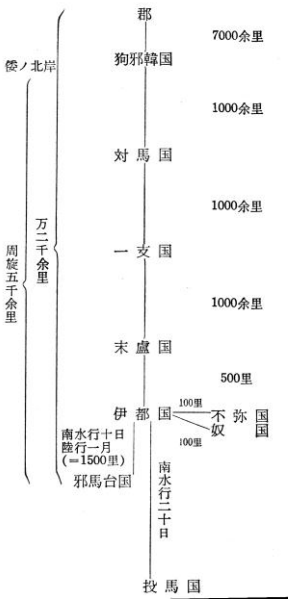
①　南を東に読み替える説（畿内説）

下図は典型的な畿内説の一つ。魏志の東を南に読み替えている。日本列島が南に延びていたと当時、認識していたという説を弄する。

３世紀にそういう認識があった証拠はない。あるのは15世紀の「混一彊理歴代国都之図」（竜谷大蔵）だが、これも同図の基になった地図を写したと思われるもの（本光寺蔵）が、見つかり、それでは南に延びておらず、描くときに地図に収まらずに逆さに描いた可能性があることがわる。なんとか邪馬台国を近畿に持っていきたいとの思いを反映している。（総延長方式）

②　伊都国を起点に放射式ルート説（榎説＝九州説）

榎説は魏志のルート記事の原文で、伊都国の前と後で方角に表現方法が異なることから、伊都国以降は放射式に読むべきとした。その表現方法の違いとは、伊都国までは「東南に陸行すること 500 里で伊都国に至る」とあるのに対し、伊都国以降は「東南して、奴国にいたる。100 里である」と表現してあることに注目した。



私の邪馬台国探しのスタンス

私は昭和２０年の生まれですから、学校で神話の話を聞いたことがありません。ですから、歴代の天皇の名前を言えといわれても、小さい時の刷り込みがないものですから、エーと、エーとですらすら言えません。私より７歳上の姉になるともう完全で、すらすらです。今、こうやって歴史について話すようになって、うらやましいなとか思っていますが、とにかく、神話とは無縁の世界で育ってきました。今も学校では、そういう教育がないですから、子供と神話について話すことはまったくありません。

恥ずかしい話ながら、大学で史学、しかも日本史を専攻しながら、実は神武東遷について、ほとんど知らなかった。「邪馬台国」論争とかは、授業でも講義があり、学生うちで議論しましたが、神武東遷で、南九州から大和に入るというお話を上の空というのか、そういうお話があることすら意識になかったといったらいいのでしょうか。それが戦後の歴史教育というものなのでしょう。

その後、新聞記者として岡山出身で、産能大教授の安本美典先生に取材で、お目にかかって、卑弥呼＝天照大御神、甘木＝高天原説を聞き、そう考える人もいるのかなと、いうぐらいに考えていました。平成４年に、安本先生が「邪馬台国は、その後どうなったか」という本を出して、「ええ、日本の歴史というのは古事記、日本書紀に、ちゃんと書かれているではないか、邪馬台国論争でやっている不毛の論争はもういい。もう少し、日本の誕生についてしっかり目を覚ましてみようではないか…」と考えるようになりました。

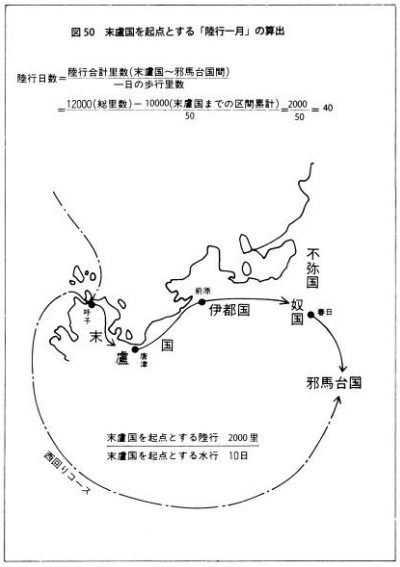
そういう視点で、日本の古代史を見るようになり、その年はじめて甘木市に行き、なんにもないここに「邪馬台国があったのか」とひとり感慨にひたったわけです。

そうすると、その翌年の平成５年、平塚川添遺跡で多重環濠発見のニュース発表があり、安本先生の先見性に感激しました。

それなら日本の古代史の真実をもっと多くの人に知ってもらいたいという欲望にかられたわけです。退職後になるかもしれませんが、私が日本のシュリーマンになれるわけもありませんし、お金もないですから、日本のシュリーマンが出てくるために、いくつかの構想を立て、それを実現したいと、いま考えているわけです。（8年前のシンポジウムでの私の発言）

さらに「南水行 10 日陸行１月」を水行すれば 10 日、陸行すれば１月と解釈した。結論として水行 10 日は伊都国から長崎方面を大回りして、有明湾に入り、三井郡あたりを比定地にしている。陸行１月は中国では１日 50 里進むという思想（唐六典、唐代の基準が三世紀に通用するかどうかは疑問）があったので､伊都国からの距離 1500 里を 50 里で割ると 30 日になると説明している。（放射式は 22 年に発表。先人の研究もあったようだ）

【注】現在、三井郡は大刀洗町のみだが、1896 年 4 月 1 日、郡制に基づき御井郡（みいぐん）・御原郡（みはらぐん）・山本郡（やまもとぐん）を合併させて三井郡となった。当時の郡域には、現在の小郡市の全域が含まれていた。2005 年 2 月 5 日、北野町は浮羽郡田主丸町、三潴郡城島町・三潴町と共に久留米市に編入した＝Wikipedia から。安本美典氏の比定する夜須郡は三井郡の隣）



複説で水行１０日を説明した図＝奥野正男著「邪馬台国はここだ」から

③ 大和への東遷を反映した錯誤説（「新考邪馬台国への道」の安本説）

安本氏は同書で「『重ね写真』説も考えられる」、として陳寿（233－297）が三国志を書いたのは 285 年前後で、自分の仮説（古代天皇在位 10 年説）に基づけば、神武東遷後で、倭国の都は奈良に移っていて、両方の情報が交錯していて、邪馬台国が九州におさまる説（帯方郡から 12000 里、伊都国から 1500 里）と奈良までの距離を記した説（水行 10 日陸行１月）の両方を書いてしまった、とするもの。また、方角については南九州に瓊瓊杵尊が天下っていたこととも関係するのではと推論している。「本居宣長の１月は１日の誤り」とする説も紹介している。白鳥庫吉氏も１日説。

④ 帯方郡起点説（奥野説）

奥野氏は帯方郡起点説をもとに､邪馬台国の筑後川北岸説をより強固にした。現段階で最も信憑性のある説といえる。

帯方郡起点説のさきがけは、古田武彦氏。昭和 46 年（1971）に「『邪馬台国』はなかった」で述べたものだが、奥野氏は、「古田氏は陸行１月には朝鮮半島や対馬・壱岐に取るなど、私の解釈とだいぶ異なっています」（著作集Ｉp467）と述べている。

奥野氏が「帯方郡起点説」を称えたのは、「邪馬台国は古代大和を征服した」（1990 年、平成 2 年）から（著作集Ｉp466）としている。

その論旨は、魏志は、まず最初に「郡（帯方郡）より倭に至るには」と前置きして、前段の狗邪韓国から対馬国・一支国・末盧国・伊都国・奴国・不弥国の国々に至る行程を水行・陸行。方位、里数で表記しています。

次に後段の投馬国と「女王の都するところ・邪馬台国」に至る行程を水行・陸行、日数で表記しています。

次に 21 の旁国名のあと、「その南に狗奴国あり」とし、全行程の最後に再び「郡（帯方郡）より女王国に至るには」と記して「万二千余里なり」という里数の合計を記しています。

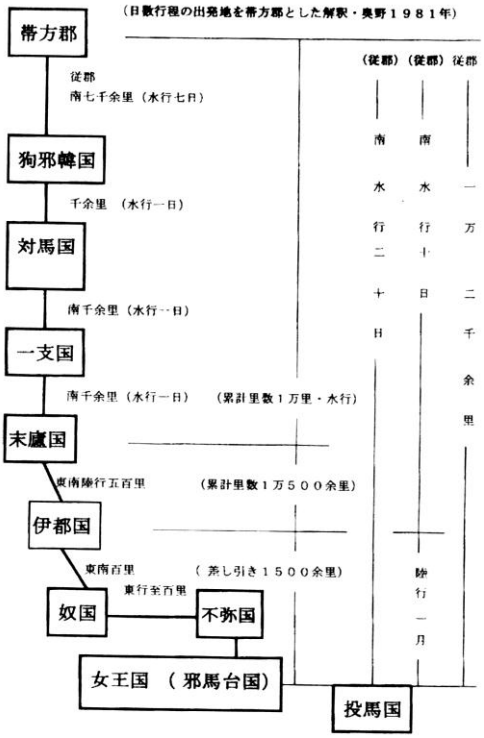


図 10　邪馬台国への行程

ここで注意すべきことは、里数と日数の行程記事の初めと終わりに「郡（帯方郡）より～に至るには」と、出発地つまり起点を記していることです。

魏志の行程記事は、上記の用例から見て、里数で記した行程も日数で記した行程も、両方とも帯方郡を出発点に女王国に至る行程を記しているのです。つまり「郡（帯方郡）より倭に至るには」里数で書けば「一万二千余里」、その里程を日数で示せば「水行十日・陸行一月」と書いているのです。

行程記事は、里数にしても、日数にしても、出発地から到着地区までの国境間を数字で書いてあるから、算式を作ることができます。

このような算式で、九州説・近畿説の行程を検討していくと、近畿説の算式は、里数＋日数＝里数という成立不能な矛盾を抱えた解釈論であることがわかります。この区間里数の合計が一万二千余里です。日数は、里数に加算できないものであり、郡から女王国までの里程に必要な日数（水行十日・陸行一月）なのです。

近畿説を検討してみると、郡から不弥国までの区間距離の合計に、投馬国から近畿地方の女王国に至る（水行十日・陸行一月）という日数を加えた合計が「一万二千余里」という数字なのだ、という解釈論なのです。里数と日数を加えた合計が里数になるなどという距離概念を、果たして魏志の著者・陳寿が文章として記載したかということです。要するに九州説と近畿説の算式のどちらが当時の中国人の距離観に近いか考えることである、としている。

さらに魏志の他の記述の文例として、注の中で、三国志「魏書」明帝紀第三の景初二年条に引用の「晋紀」や「魏魂名臣奏」には、遼東の公孫淵を討つための軍議で、洛陽から遼東までの里数を、「四千余里」とし、これを行くのに必要な日数を「百日」としています。また『漢書』南蛮伝に、荊州から日南（ベトナム）までを「九千余里なり。三百日にして到る」と書く例があります。長途の旅程を里数で記した後、つづけてその旅に必要な日数を記すのは、文章としてもっとも理解しやすい書き方ではないでしょうか。

こうした中国史書の旅程の記述方法を「魏志倭人伝」にあてはめると、「自郡至女王国、南水行十日陸行一月」という記述は、帯方郡から女王国までの　「一万二千余里」の旅程にかかる日数であらわしたものといえます。同じように「南して投馬国に至るに水行二十日」という記述も、帯方郡から水行での日数をあらわしたものと読めます。投馬国の位置は、「南水行二十日」という日数の史料だけで比定することはできません。あえて候補地をあげれば、水行二十日のうち、末盧国までに十日費やしているから、残りは十日です。九州の遠賀川流域に、あるいは九州の東回りで豊前や宇佐に比定することもできます（奥野正男著作集 1p469）、と述べている。

魏志の邪馬台国への旅程記事の解釈で、現在、これを超えるものはないと思う。

キルビメーターの測定は科学的？―奥野先生からの疑問

『魏志』倭人伝の記録からしても帯方郡使がきたとわかるのはわずか二回にすぎない倭国の里数が、今日の実際の距離に合わないのはこれもまた当然のことであろう。そのことよりも、狗邪韓国から伊都国までの各国間の里数が、あまり異論のない比定地でもある朝鮮半島南岸、対馬、壱岐、唐津、糸島の各地の間の実数と比例的にはほぼ一致しているという事実こそ、まずこの時代の中国人の距離感の反映として注目すべきであろう。それが実数のうえで四、五倍になっているとしても、陳寿がそれを記載している以上、その事実こそが陳寿の地理観をしめしているものでなくてなんであろうか。

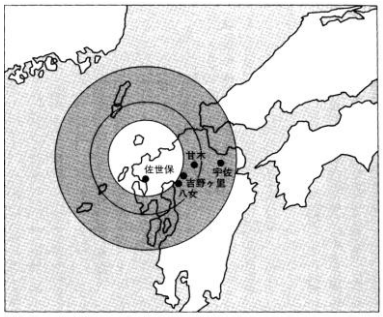
だが、里数が実際の距離と合うかどうかという論議は周知のように「長里」か、「短里」かという論争にまで発展しているが、そのいずれに立つ場合でも、合う合わないかの判断には両者共通の方法がとられている。つまり、文献記載の二つの地点の里数と、その〝実際〟の距離を図上から測定して比較する。なかには曲折した〝実際〟の距離を知るためにキルビメーターなども用いられている。（中略）（しかし）当時の里数が正確な実測値でないことはだれも容易にわかることであり、当然ながら当時の陸上交通路や船の航路にそった里数が基本になっていたと思われる。（中略）

たとえば畿内説、九州説をとわず「末慮国」を唐津付近に、「伊都国」を糸島郡前原付近にあてる説が多く、私もその説にしたがっているが、その両国の国境ということになると正確にはとうていきめられない。唐津－前原間の海岸線の交通路ひとつ例にとっても、現在の国鉄筑肥線と併行する道などは近世のもので、唐津湾をのぞむ平野部や二丈町福吉、糸島郡前原町などの海岸線にしても、弥生時代には標高五メートル前後の地点まで深く湾入していたことが考古学的に推測できるのである。したがって、「東南陸行五百里」という伊都国への行程ひとつにしても、これを学問的に解明しようとするのであれば、当時まだ海だったところに人を歩かせるわけにはいかないのである。地図にキルビメーターをあてて距離をだすというのは一見科学的にみえるが、古代のほんとうの交通路を明らかにせぬかぎり、そこで得た数値を『魏志』倭人伝の里数と比較するということは、結局、推定不能の誤差をふくむ仮説上の作業なのである。

（同時に）『魂志』倭人伝の里致そのものが実測値ではない概数であるとすれば、これをメートルに換算し、さらにさきにのべたように二点の位置を科学的にきめられない比定地間の距離にあてていくということは、すでに文献資料の限界を明らかに超えたものとしかいえないのである。

このような考えに立つと、『魏志』倭人伝の里数は、他に比定地を求めることができない海洋上にある対馬国（対馬）と一大国（壱岐）の「千余里」を基準にして、他の里数は比例的に判断していくという立場がもっとも妥当であると思う（奥野正男著「邪馬台国はここだ」著作集 p134,135）

(2)　畿内説が成り立たない証拠

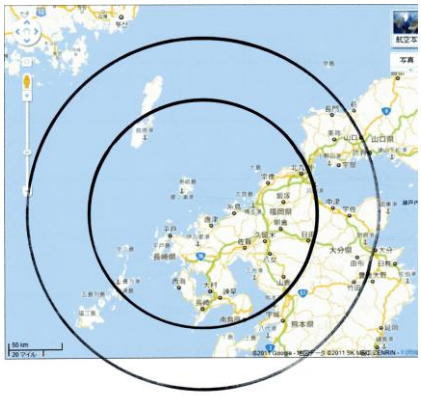


地図7　末盧国から邪馬台国まで(藤井滋氏による)

私の 1 回目の講義でも紹介したものだが、末盧国から邪馬台国の距離は、帯方郡からの距離 1 万 2000 里から、帯方郡―末盧国間（7000 里+3000 里＝1 万里）を引いた距離（2000 里）の中にあるという事実である。

とりあえず島の陸地距離などは無視して計算することにした。

また藤井滋氏が 1 里を何キロに設定したのか情報がないが、おそらく 1 里を周の短里約 70 メートルと考え、地図上に描いてみた。ところが、図より最小範囲が大きくなった



2000 里に無理があるか、1 里 70 メートルに無理があるかだ。しかし、論理としては正しいので、この考えに基づく図か作れるかどうかが、今回の検証のがカギとなる。

縮尺＝50 キロ＝2.4 ミリ	最小範囲
最大範囲	1500 里とする。
2500 里とする。	1500×70＝105000＝105 キロ
2500×70＝175000＝175 キロ	105÷50×24＝50.4＝5 センチ
175÷50×24＝84 ミリ＝8.4 センチ	（Google 地図で検証したもの）

(3)　実際の道

≪倭人伝の 1 里は何キロか≫

	「魏志倭人伝」の記述	実際の距離（中数）	1 里は何メートルか
帯方郡（京城（ソウル））→狗邪韓国（巨済島（金海））（あるいは南し，あるいは東す）	7000余里	630～710km（670km）	96m弱
狗邪韓国（巨済島（金海））→対馬国（佐賀（厳原））（一海を渡る）	1000余里	64～120km（92km）	92m弱
対馬国（佐賀（厳原））→壱岐国（黒ノ辻（勝本））（南，一海を渡る）	1000余里	58～138km（98km）	98m弱
壱岐国（黒ノ辻（勝本））→末盧国（呼子（唐津））（一海を渡る）	1000余里	33～ 68km（51km）	51m弱
末盧国（呼子（唐津））→伊都国（井原（前原））（東南，陸行）	500 里	32～ 47km（40km）	80m
伊都国（井原（前原））→奴国（春日市（須玖岡本））（東南（行）する）	100 里	23～ 30km（26.5km）	265m
奴国（春日市（須玖岡本））→不弥国（宇美町（港成町））（東行する）	100 里	6～ 24km（15km）	150m
合　　計	10700余里	912.5km	93m弱

表2　「魏志」「倭人伝」の 1 里は何メートルか

安本美典氏が、季刊邪馬台国 35 号（p18,19＝上）と「邪馬台国への道」（下）で示した表 2 つを引用する。

帯方郡の位置については、はっきりしていないが、上の表では「京城」（ソウル＝風納土城）を帯方郡とし、1 里は平均 93 メートル弱が結論である。（奴国を春日市の須玖岡本遺跡を比定しているが、実際は福岡市の西のはずれかもしれない。それも誤差となっていると思われる。福岡市の那珂川に比定すれば、165m となる）下表は帯方郡を「開城」（北朝鮮領内）に変更、対馬、壱岐島内は、遺跡に合わせている。

	「倭人伝」の記述	実際の距離（中数）	1里は何メートルか
帯方郡(開城)→狗邪韓国(鎮海)（あるいは南し、あるいは東す）	7000余里	580km～680km（630km）	90m弱
狗邪韓国(鎮海)→対馬(鹿見)（一海を渡る）	1000余里	80km～110km（95km）	95m弱
対馬(鹿見)→壱岐(原の辻)（一海を渡る）	1000余里	80km～120km（100km）	100m弱
壱岐(原の辻)→末盧国(呼子町)（一海を渡る）	1000余里	47km～ 57km（52km）	52m弱
末盧国(呼子町)→伊都国(怡土) 伊都国(怡土)→奴国(那珂川町)	500里 100里	53km 16.5km	106m 165m
合　　計	10600余里	946.5km	89m弱

表19 『魏志倭人伝』の 1 里は何メートルか

【注】奥野先生の批判したキルビメーターで測ったのは安本先生のことであるようだ。

二つの表でわかるように、出発点、経由地を確実に決めることは難しい。

しかし、おおよその位置は決められ、1 里当たりの長さは思うほど異ならないことである。

北朝鮮内の帯方郡候補地

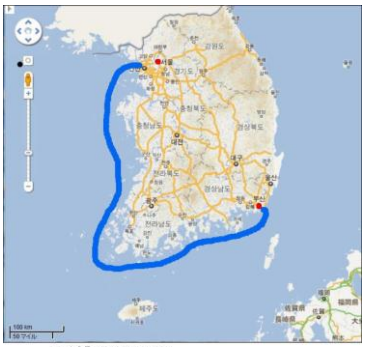
・開城＝38 度線の板門店の西。ソウルにも近い。

・黄海道鳳山郡文井面（沙里院）＝古墳の内部で、積まれたレンガに「帯方太守張撫夷」の文字が発見されたため、ここを帯方郡とする説が出た。しかし楽浪郡にあまりにも近いとし墓だけつくられたとも考えられる。

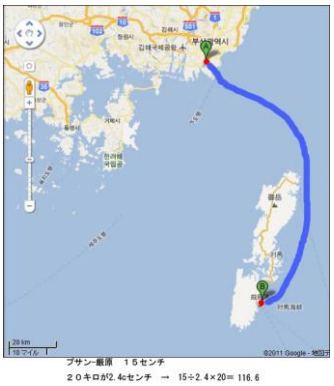
≪朝鮮半島から対馬≫

朝鮮半島と対馬については、道路地図が使えないので Google 地図で検証してみる。

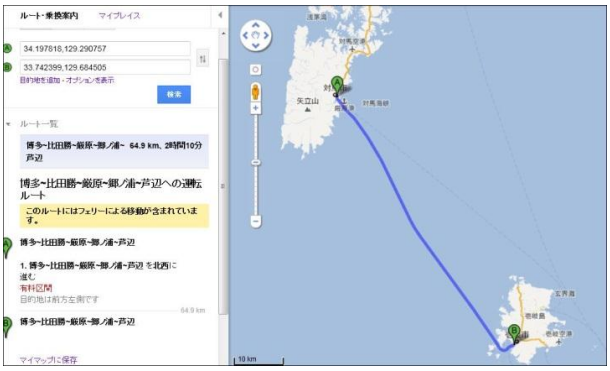
≪ソウループサン間≫



≪プサンー厳原間≫



≪厳原ー郷ノ浦間≫



・ソウループサン間は印刷物の上で 20 センチ
・100 km が 3 センチ。
・20÷3×100＝**670 km**
・安本氏のデータとほぼ同じといえる。

・プサン―対馬・厳原間は印刷物の上で 15 センチ
・20 km は 2.4 センチ
・15÷2.4×20＝**116 km**
・対馬の南部の厳原を基点にしたため、安本氏のキルビメーターの結果（98 キロ）とかなりの狂いが生じた。

・国内は Google 地図の二点間の自動車による距離時間計算を利用した。
・厳原―郷ノ浦　**64.9 km**
・地点の取り方でばらつきはあるが、安定した区間。

≪郷ノ浦ー呼子間≫

・印通寺港ー唐津壱岐フェリー発着所は 41.2 km
・呼子に上陸地点を求めるとすると唐津壱岐フェリー発着所ー呼子港館（16.7 km）を差し引く必要がある。その結果　41.2 km－16.7 km＝**24.5km** となる。
・さらに呼子を上陸地点に求めるべきだが、現在呼子港ー壱岐間のフェリーがないため、唐津に上陸し。そこから呼子まで戻った距離を引いたためか、安本氏のキルビメーター（51km）と大きな差が出た。24.5 km は過大に小さいので 10 万分の 1 地図で測った **30 km** が適正か？

この結果を表にしてみる

帯方郡から末盧国まで	魏志の距離	実際の距離	一里当たりの距離
帯方郡（ソウル）―狗邪韓国（プサン）	7000 里	670 Km	95.71 m
狗邪韓国（プサン）―対馬国（厳原）	1000 里	116 Km	116.00 m
対馬国（厳原）―一大国（壱岐・郷ノ浦）	1000 里	64.9 Km	64.90 m
一大国（壱岐・郷ノ浦）―末盧国（呼子）	1000 里	24.5 Km	24.50 m
合計	10000 里	875.4 Km	87.54 m

平均値では安本氏の「季刊邪馬台国の表」（一里当たり平均 93 メートル）と、「邪馬台国への道」（同 89 メートル）今回の計算結果 87.5 メートルは、起点や経由地が異なりながら、誤差の範囲に収まっているようだ。

≪時代別の中国の長さの単位の変化≫

	周・春秋・戦国・前漢 前10～前1世紀	新・後漢 1～3世紀	魏 3世紀	隋 6～7世紀	唐 7～10世紀	宋・元 10～14世紀	明 14～17世紀
分(cm)		0.2304	0.2412	0.2951	0.311	0.3072	0.311
寸(cm)	2.25	2.304	2.412	2.951	3.11	3.072	3.11
尺(cm)	22.5	23.04	24.12	29.51	31.1	30.72	31.1
丈(m)	2.25	2.304	2.412	2.951	3.11	3.072	3.11
歩(m)	1.35	6尺 1.3824	6尺 1.4472	6尺 1.7706	5尺 1.555	5尺 1.536	5尺 1.555
里(m)	405	300歩 414.72	300歩 434.16	300歩 531.18	360歩 559.8	360歩 552.96	360歩 559.8

表３　長さの単位の時代別変遷表　（『角川漢和中辞典』による）

この表では周の短里は説明されていないが、邪馬台国のホームページ（次ページの囲み記事）のように地域、支配者（グループ）によって使うモノサシは異なるようだ。

また、「魏志」中の倭伝以外でも「韓…方可四千里（「韓は、四方は四千里ばかり）」の記事もあり、倭だけでなく韓でも中国の 1 里 434m より短い単位が使われていた。(安本美典著「邪馬台国ハンドブック」 p 147)

同ホームページでは、洛陽晋墓遺物の　5 尺度について紹介。「西暦 300 年ごろの洛陽

晋墓からモノサシが発見された。これは、1 尺が 16cm くらいになっていて、魏の 1 尺＝24.12cm の 2/3 くらいの長さである。周の時代の小尺と思われる」とある。

地　域　的　短　里　説

はじめにこの説を唱えたのは白鳥庫吉であったが、『魏志』の「高句麗伝」や「夫余伝」に記載された距離を実測値と比べると、ほぼ標準里になっていることが判明してきたので、白鳥は地域的短里説を否定して、（上記の）誇張説を主張するようになった。山梨大、立命館大の教授だった地理学者の藤田元春は『上代日支交通史の研究』のなかで、魏志倭人伝の道里について述べ、「魏略時代に書記された多くの倭韓の里は古周尺の尺度による」としている。すなわち、実際に当時おこなわれていたモノサシによるものであろうとした。

藤田氏は、わが国においても、地域によって、一里が 36 町であったり、50 町であったり、42 町であったり、5 町であったり、6 町であったり、不定ではあるが、それなりの標準があったことを述べ、『魏志倭人伝』の道里もそれほど不確実なものではないであろうとする。

更に、藤田氏は、「道里というものは、いったん定まると容易にかわらないといえる。したがって、『魏志』の道里なども無闇に記したものではなく、おそらく魏以前のよほど古い時代の言い伝えではなかったかと考える。

漢代の一里は、およそ 400 メートルである。しかし、日本は遠い国であって、漢代では中国本土の尺よりも、さらに古い尺を用いていたのではなかったか。漢尺よりも古い尺は周尺である。」と述べる。そして、いくつかの仮定をおいたうえであるが、藤田氏は次のように結論を述べる。

「魏略時代に書き記された多くの倭韓の里は、すべて今の日本里（一里＝約 4 km）の 1/40 という古周尺の尺度（一里＝約 100m）で、全部明瞭に説明がつく」

安本先生も著書『邪馬一国はなかった』の中で、周・春秋・戦国時代の「短里」が残存した可能性について次のように述べた。千数百年前、日本より広い中国で、時代的、地域的にさまざまなモノサシが用いられた可能性がある。陳寿は、もとの資料にあった「里数」を尊重し、それをそのまま『三国志』にのせた可能性が大きいと考えられる。

陳寿が、どの地方でどのような里制が行われていたかを正確に知り、それらを統一的に換算することは、困難であったろうと思う。

そして、周・春秋・戦国の時代に（ある地域で）行われていた「短里」が、三国時代においても、朝鮮半島南部を中心とする中国周辺で、地域的に行われていた可能性が大きい。

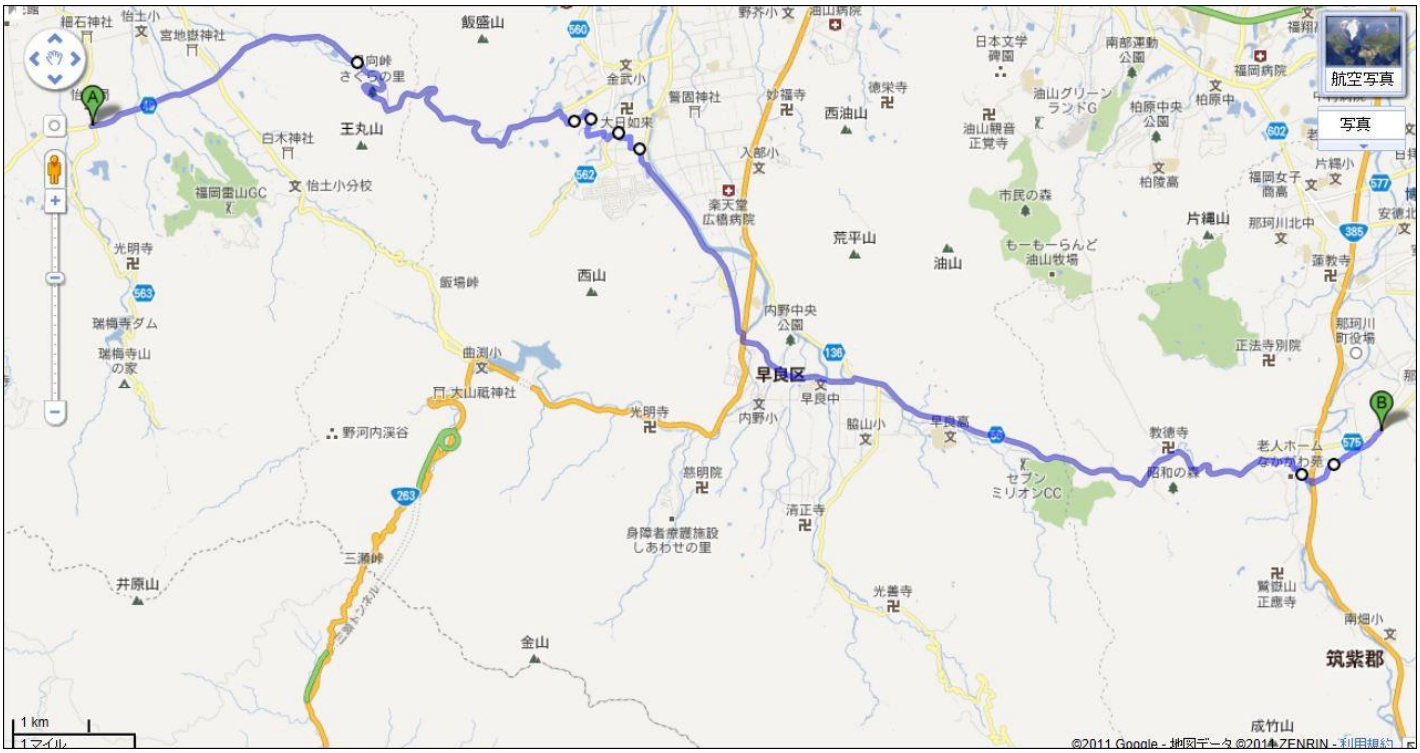
なお、中国最古の天文算術書といわれている『周髀算経』にのっている「里」の一里が、約 76～77 メートルになることについて谷本茂氏の論文がある。（季刊邪馬台国 35 号）＝邪馬台国の会ホームページ・http://yamatai.cside.com/katudou/kiroku275.htm から

≪九州島内のクニごとにみてみる＝Google マップ自動車移動で検索≫

①　末盧国（呼子港）―伊都国（三雲遺跡＝細石神社近く）500 里　実測 52.4 km、1 時間 35 分

52.3 キロを 500 里で割ると 104.6km で、1 里当たりの距離はきわめて標準的な数値となる。
到着点を細石神社に近い国道に設定した理由は、三雲遺跡に近くて、日向峠への途中で県道に面していること。

② 伊都国（三雲遺跡＝細石神社）―奴国（安徳台＝裂田神社付近）100 里　実測 25.2 km、1 時間 7 分



252 キロを 100 里で割ると 1 里が 252m となり、1 里 100m 前後の基準の 2.5 倍強となる。どこかに問題がある。それは比定地か？　帯方郡からの距離の取り方か、また、魏志（陳寿）は倭の地理については、それぐらいの幅でしか、理解していなかったかのどれかであろう。

奴国を裂田神社近くに設定したのは、奴国の中心とされる春日市の須玖岡本とより、同神社そばの安徳台が要害の地であり、古代の都にふさわしい。これに対し須玖岡本は低い丘陵と平地部に囲まれ、農業や金属器生産地としての中心地で、高句麗の丸都と国内城の関係であろう。各クニの中心部は徐々に海岸部に移っているようである。

③ 奴国（安徳台＝裂田神社付近）―不弥国（宇美＝上ノ原）100 里　実測　15.7 km、42 分

15.7 キロを１００キロで割ると１里は 157m でやや長いが、許容範囲のように見える。奴国の都説もある須玖岡本遺跡付近を通るルートだ。

左の囲み記事の下線部分以降に、邪馬台国への方角と里数が書かれるべきだが、書かれていない。

ここで多くの邪馬台国論が分かれるところだが、奥野説では、「南至投馬國水行二十日」と「南至邪馬壹國女王之所都水行十日陸行一月」は帯方郡からであるとする。

この点が最も革新的で、邪馬台国へのルートがかなりうまく説明できそうだ。問題は本来の目的地である「邪馬台国」への方角と里数があるべきだと思うが、現実にはない。

単想像にすぎないが、ここに「邪馬台国への方角と里数があるべきが、落ちている」との疑いを持っている。さらにいえば、奥野説の起点である「郡（帯方郡）より」も記載されていた可能性もある。

≪不弥国以降の記述≫

「…東行至不彌國百里

（東行不弥国に至る百里）

官曰多模副曰(卑)奴母離

（官を多模といい、副を卑奴母離という）

有千餘家（

千余家あり）

南至投馬國水行二十日

（南、投馬国に至る水行二十日）

官曰彌彌副曰彌彌那利

（官は弥弥といい、副を弥弥那利という）

可五萬餘戸

（五万余戸ばかり）

南至邪馬壹國女王之所都水行十日陸行一月

（南へ邪馬壹国に至る、女王の都する所、水行十日陸行一月）」

水行 10 日陸行 1 月は、帯方郡から出発すれば水行は妥当、陸行は確かに長く、榎説では唐の時代の基準である、1 日の歩行距離 50 里から、伊都国―邪馬台国刊 1500 里を 50 里で割り 30 日を引き出したとする説、あるいは奥野氏の説だったかもしれないが、対馬・壱岐両島の距離（700 里）を里数から引けば、末盧国―邪馬台国間は 1300 里で。三国志当時、一日当たり軍の進む距離 40 里で割れば 32 日で、陸行 1 月に近くなるという説もある。

水行 20 日の投馬国（与と馬の略字はそっくりで誤記。馬が与だったらトヨ＝豊と読める）は陸行の必要がない行橋市あたりの「豊の国」が最もふさわしい。帯方郡から末盧国が水行 10 日で、末盧国―投馬国 10 日は合理的である。

≪残り里数から邪馬台国を探る≫

末盧国から不弥国まで		魏志の距離	実際の距離	一里当たりの距離	邪馬台国への残り里数	対馬と壱岐の陸地部700里をさしひいた里数
	末盧国からの				2000 里	1300 里
	末盧国（呼子）－伊都国（三雲＝細石神社）	500 里	54.2 Km	108.40 m		
	伊都国からの				1500 里	800 里
	伊都国（三雲＝細石神社）－奴国（那珂川町裂田神社）	100 里	25.2 Km	252.00 m		
	奴国からの				1400 里	700 里
	奴国（那珂川町裂田神社）－不弥国（宇美町上ノ原）	100 里	15.7 Km	157.00 m		
	不弥国からの				1300 里	600 里
	合計	700 里	95.1 Km	135.86 m		

帯方郡から邪馬台国までの距離は、これまで何度も言ってきたが、1 万 2000 里である。

帯方郡から末盧国までが 1 万里で残りは、2000 里となる。倭人条の 1 里が 100m 前後であることも、これまでの諸説や今回の地図上での作業で判明している。しかし、藤井氏の試算図より範囲が大きく、筑前・筑後平野の弥生時代の遺跡集中地域が外れ、奥野説の「邪馬台国＝吉野ヶ里」、安本説の「邪馬台国＝朝倉・甘木説」も成り立たない。

とはいえ、魏志の実際上の里数を変えられないとするとどこかに問題があるようだ。

そこで、平成 12 年の私の講義録を見ると、対馬と壱岐島内の距離 400 里（対馬）と 300 里（壱岐）を加えた表を載せていた。引用元の奥野先生の「邪馬台国はここだ」（昭和 56 年刊）をみてみると、確かに「諸説のなかには、区間里数に、対馬国と一大国の里数をいれない諸説や、対馬国を八百里、一大国を六百里の陸行とする古田説などがあることはすでにふれたが、私は対馬国と一大国の大きさは、文献の記載どおりに『四百里』、『三百里』としてくわえるべきだと思う。」（ｐ220）と書かれている。

ところが、新しく出版された著作集ではこの部分が削除され、表でも陸地部分は載っていない。帯方郡起点説は 1991 年の「邪馬台国は古代大和を征服した」発刊以降で著作集出版にあたり変更したようだ。たしかに陸地部分を

カウントする必要性はないようにも思うが、地図上での測定ではきわめて整合性を発揮してくれた。

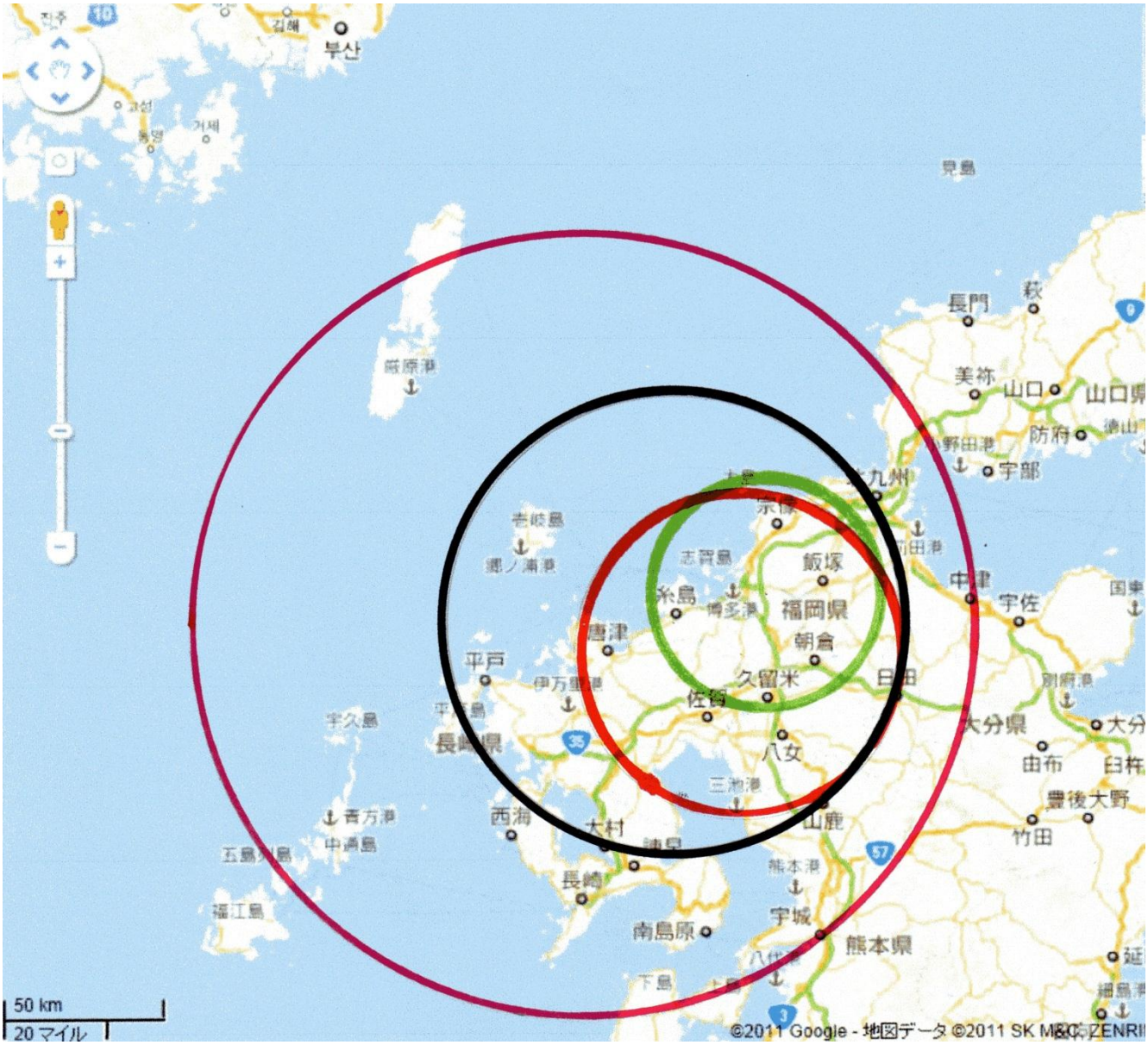
また、伊都―奴国間と、奴国―不弥国間が他に比べ 1 里当たりが長いことに気が付く。しかもともに 100 里と記されることに違和感がある。そこで伊都―奴国間の 100 里を他の区間の比率に合わせ 250 里、奴国―不弥国間の 100 里を 150 里として計算することにした。

その結果、末盧国以降の里数は下記の表のようになった。

末盧国から不弥国まで		魏志の距離	実際の距離	一里当たりの距離	邪馬台国への残り里数
	末盧国からの				1300 里
	末盧国（呼子）－伊都国（三雲＝細石神社）	500 里	54.2 Km	108.40 m	
	伊都国からの				800 里
	伊都国（三雲＝細石神社）－奴国（那珂川町裂田神社）	250 里	25.2 Km	100.80 m	
	奴国からの				550 里
	奴国（那珂川町裂田神社）－不弥国（宇美町上ノ原）	150 里	15.7 Km	104.67 m	
	不弥国からの				400 里
	合計	900 里	95.1 Km	105.67 m	

これをもとに地図上に 1 里 100m で円を描いてみる。

≪1 里 100m に基づきそれぞれのクニから邪馬台国のある範囲の円を引いた図≫



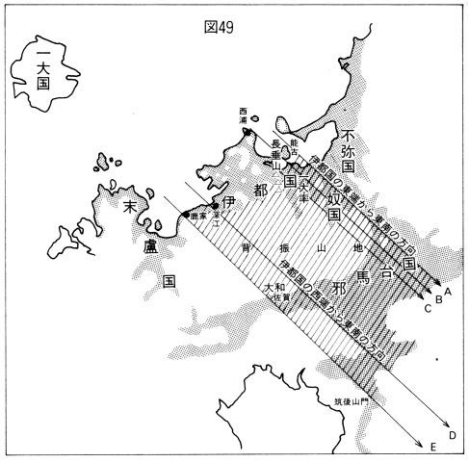
邪馬台国は 4 つの円の重なった中あるはずだ。

そうすると、あと方角情報をいれると、かなりの確率で邪馬台国の位置ははっきりするであろう。

さらに弥生時代の遺跡集中情報を重ね合わせるとさらに確かな情報が得られる。

方位情報は下記の表のとおり。

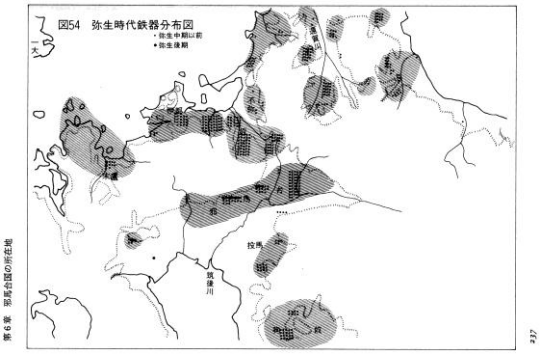
	魏志の方位	比定地への実際の方向
末盧国		
↓	東南	東
伊都国		
↓	東南	東（やや南に傾く）
奴国		
↓	東行	北東
不弥国		



奥野正男著「邪馬台国はここだ」p217

魏の使いが来た時は、玄界灘の穏やかな、春から夏にかけて来たので 45 度反時計回りにずれるといわれており、これを根拠に伊都国の南とされる邪馬台国は筑前・筑後平野に比定されている＝奥野氏の筑後川北岸説。右上はその説明図。

≪弥生時代の遺跡図≫



奥野正男著「邪馬台国はここだ」p237

前頁の円で示した候補地域内での弥生遺跡集中地と重ね合わせたとき、邪馬台国は朝倉・甘木、小郡、吉野ヶ里が候補地といえよう。日田はかする感じだ。

日田は「天の八衢」（あめのやちまた）？

日田盆地へは多くの道が集まっている。現在は道路網の中心は高速道の鳥栖ジャンクションのように見えるが、地図を見てみると 8 つの方面（飯塚、行橋・中津、大分、阿蘇、菊池、久留米、朝倉）からの道が日田に集まっている。八衢は、猿田彦と天の鈿女の命の出会ったところでもある。猿田彦は塞曹掾士（さいそうえんし）・張政（ちょうせい）の化身とする説がある。2 人は瓊瓊杵尊の命で結ばれ、子孫は猿目の君といわれる。鈿女の命は難升米か、その一族ではないかという説もある。

≪不弥国以降は？≫

不弥国以降は邪馬台国に直接行ったかどうか、あるいはどの方向に行ったかは魏志には書かれていないが、不弥国の記事の後には「南至投馬国…」に続き、さらに南に邪馬台国があるとしているので、邪馬台国は不弥国の南にあたる。不弥国の南は小郡だが、反時計方向にずれるので南東にある朝倉・甘木が邪馬台国の可能性が高い。奥野説の吉野ヶ里は反対にずれている。

では、不弥国（宇美町上ノ原＝藤島正之著「遥かなる奴国」参照に決める＝2008 年の講義で紹介）からどのコースで邪馬台国へ行ったのだろうか検証しよう。

≪3 つの試論・不弥国―邪馬台国のコース≫

不弥国―邪馬台国（朝倉・甘木 31.9 km）

不弥国―邪馬台国（小郡 25.4 km）

不弥国―邪馬台国（吉野ヶ里 44.7 km）

3 地点とも有力候補地には違いない。3 世紀の魏志の記事はある程度ゆるい基準で読む必要があろう。

（4）大胆な仮説

＜これまでの倭人条＞

（不弥国の情報）→に続いて

南至投馬国、水行二十日、官曰弥弥、副曰弥弥那利、可五萬餘戸。

南至邪馬台国、女王之所都、水行十日、陸行一月。官有伊支馬、次曰弥馬升、次曰弥馬獲支、次曰奴佳鞮、可七萬餘戸。

自女王国以北、其戸数道里可得略載、其餘旁国遠絶、不可得詳。次有斯馬国、次有己百支国、次有伊邪国、次有都支国、次有弥奴国、次有好古都国、次有不呼国、次有姐奴国、次有対蘇国、次有蘇奴国、次有呼邑国、次有華奴蘇奴国、次有鬼国、次有為吾国、次有鬼奴国、次有邪馬国、次有躬臣国、次有巴利、次有支惟国、次有烏奴国、次有奴国、此女王境界所盡。

其南有狗奴国、男子為王、其官有狗古智卑狗、不属女王。自郡至女王国萬二千餘里。

すでに指摘した錯簡問題について私の考えを述べてみよう。

・囲みの中の最後の下線の部分（距離情報）が、「女王国以北は概略説明できるが、旁国（21 国）は遠絶で詳細はわからないと述べ、奴国（金印の奴国とは別であろう）が女王国の尽きるところだ。その南に女王国に属さない狗奴国がある」とした後、突然のように「自郡至女王国萬二千鎗里」の距離情報が出てくる。不自然さを感じるのは私だけでなく、奥野氏も「錯簡説」に触れている。

≪新解釈の倭人条≫

（不弥国の情報）→に続いて

南至邪馬台国、（至四百里）。**女王之所都、官有伊支馬、次曰弥馬升、次曰弥馬獲支、次曰奴佳鞮、可七萬餘戸。**

自郡至女王国萬二千餘里、水行十日、陸行一月。

（南）至投馬国、水行二十日、官曰弥弥、副曰弥弥那利、可五萬餘戸。

自女王国以北、其戸数道里可得略載、其餘旁国遠絶、不可得詳。次有斯馬国、次有己百支国、次有伊邪国、次有都支国、次有弥奴国、次有好古都国、次有不呼国、次有姐奴国、次有対蘇国、次有蘇奴国、次有呼邑国、次有華奴蘇奴国、次有鬼国、次有為吾国、次有鬼奴国、次有邪馬国、次有躬臣国、次有巴利、次有支惟国、次有烏奴国、次有奴国、此女王境界所盡。

其南有狗奴国、男子為王、其官有狗古智卑狗、不属女王。

・そこで元の 2 行目の「**南至邪馬台国**」を先頭にし、（**至四百里**）を追加、「**女王之所都…**」に続ける。

・元の不自然な「自郡至女王国萬二千鎗里」を「**可七萬餘戸。**」の後へ移動。

・次いで「**水行十日、陸行一月**」を移動。

・「**南至投馬国、水行…**」の投馬国情報に続くものとする。先頭の「南」は南至邪馬台国のもので、「自郡」を受けるものと考えるべきだろう。方向は記されていなかったと考えるべきだろう。もし「南」があれば、投馬の方向は、邪馬台国の南は、東南方向、すなわち豊前豊後の「豊後」あたりを指しているようで、投馬国を行橋市方面とする説とは合わない。素直に帯方郡から水行 20 日の行橋方面がよい。

奥野氏の錯簡説

文献を勝手に変えることを邪魔台国論者と皮肉った後、「『魂志倭人伝』の帯方郡から邪馬台国までの行程記事の構成は、①方位・里数・戸数を詳しくのべた記事②方位・日数のみで概略をのべた記事③遠くて詳しくのべられない国の国名のみの記事、という順序で書かれている。（要略＝行程記事にはそうなっていない個所がある）。『三国志』本文のなかで、一つの目的地までを記すのに、一部を里数、一部を日数でごちゃまぜに書くような記述のしかたはしていないし、中国の当時の文章表現の水準からみるならば、むしろ、そこに〝錯簡〟の可能性を認めるのが妥当な見方である。『万二千余里』が③の末尾にきているのは〝錯簡〟の証拠であろう（略）。したがって『南・水行十日・陸行一月』という行程は、不弥国から邪馬台国の区間ではなく、帯方郡から邪馬台国までの道のりを、再度、要約して日数でのべたもの（略）」としている。

（「邪馬台国はやっぱりここだ・第 6 章文献上の問題」（著作集 p 396―397、1989 年刊の毎日新聞版では p 138-139）

まさに邪魔台国論者になったが、これは仮説である。錯簡を復元することは不可能に近いが、正しい情報が整い、コンピューター技術の進歩があれば可能かもしれない。その時まで結論はおあずけだが、くれぐれも科学の名において、自分のみちびき出したい結論を出すような「邪馬台国畿内論」者の轍を踏まないでほしい、というのを私のきょうの結論としたい。